大谷教師塾
教員養成ナビゲーター

大谷大学
教職支援センター

第 99 号
2012.5.22

「教師力をつける」

教職支援センター長　　岩渕　信明

この頃，教師力，学校力，人間力，地域力などというかつては耳にしなかった用語がしばしば使われるようになってきました。

指導力は指導する力，授業力は授業する力，理解力は理解する力。それなら，教師力はどう解釈すればよいのでしょう。

今回の学習指導要領の改訂に向けて行われた中央教育審議会教育課程部会の審議経過報告（平成18年）の中に，「義務教育答申においては，学校の教育力（学校力）を強化し，教師の力量（教師力）を強化し，それを通じて，子どもの「人間力」の豊かな育成を図ることを改革の目標としている。」とあります。学校力，教師力，人間力があげられています。

ここでは教師力について考えてみましょう。**教師力とは教師の仕事をするために必要な力，教師に求められる力を指していると考えられます。その力は，子どもを理解し心をつかむ力，学級をつくりあげる力，よりよい授業をつくる力，教職員と協力して子どもを導く力，保護者との信頼関係を築く力，人間性などが考えられます。**

教員になるためにはこれらの力を身に付けていかなければなりません。学生の間に，授業や各種講習会，自主的な勉強会，学校ボランティア，教師塾など様々な学ぶ場を通して教員になるための力量を高めていきます。教員になるためにはこれらの力量を高めることも大切ですが，このほかに教員として重視したいことがらがあるように思います。

教員としての職務を全うするためには，子どもと一緒に汗をかきながら，苦しいこともつらいことも頑張る気構えがなければ無理であるということです。頭脳明晰，授業もまあまあこなせるのに子どもがついてこない教師では，子どもも本人もつらいのです。

学校へボランティアに行ってかなり経つのに子どもの中に入れない人，子どもと一緒になって汗をかくのが嫌な人はちょっと大変です。小学校長期宿泊体験活動のボランティアに行ったが，もう行きたくないと思った人はいませんか。こういう状態では，教師力でいう子どもを理解し心をつかむ力が付いていきません。

このほかに，教員には保護者や地域の方とのコミュニケーションも必要になってきます。**私は人づきあいが苦手ですというのは通りません。学校，家庭，地域の連携の中で子どもを育てるのです。**

教員は，時にはそのつなぎ役をすることになります。かかわる力，コミュニケーション能力は今後ますます必要になってきます。これらの力を付けるためには広い視野で学び活動することが大切です。

大谷大学で始める「教職ステージ」･･･ゼヒトモ　志望する　教員に･･･

教職支援センター　　アドバイザー　　西寺　正

1年生の諸君へ･･･最初の一歩を！

入学おめでとう！将来，教壇に立ちたいとの願いをもつ学生は私たちを「ゼヒトモ」訪れてください。君たちの「ゼヒトモ」教職に就きたいとの思いの実現をお手伝いします。君たちに「ゼヒトモ」教職ステージに立ってほしいと願う私たちと歩み始めませんか！！

2･3年生の諸君へ･･･歩みを加速せよ！

学校支援ボランティアや各府県市の「教師塾や教員養成セミナー」などに応募し，教育の「現場」に入り込んでください。加えて3年生での「介護等体験」などで君たち自身が今後，待ち構える教職への課題を肌身で把握し，「教師冥利」という四字熟語の味わいの一端を体験してほしいものです。

教育実習･教員採用試験の諸君へ

いよいよ「教職ステージ」の本番。教職への歩みを加速していますか？私の尊敬する英語の達人の千田純一氏はNHKの英語テキストのCMで次のように語っています。

「真面目な話，みじめになったほうが，英会話は伸びる」と。真面目に勉強すればするほど，みじめな気持ちになる･･･。その繰り返しと克服のプロセスを大事にする人が英語が伸びるのだ，というのです。教員への道も似てると思います。もし，みじめになって，自分を見失いそうなとき，ゼヒトモ，私たちを訪れてください。

目次：

教師力をつける　1

大谷大学で始める「教職ステージ」

夢を実現するためにはまず行動を！　2

現場で見て感じることの大切さ　2

ボランティアの必要性　3

読書案内「図書館戦争」　3

面接セミナー体験記　4

・自らの夢に向け、一歩前進！

・言葉の受け答えがすべてではない

教員就職率59.2%

2011年度採用実績

京都市、宇治市、久御山町、大阪市、四条畷市、滋賀県、甲賀市、高島市、石川県、穴水町、富山県、射水市、長浜市、君津市の各教育委員会及び大谷中・高等学校、中央台幼稚園、大阪青凌中学・高等学校、大阪国際学園中学・高等学校、函館大谷高等学校、両洋高等学校など

※ 教員就職率
教員採用者数/教員免許取得者数

夢を実現するためにはまず行動を！

教育・心理学科 第2学年　内倉　理沙（うちくら りさ）

六度法を学んだ

教員に必要な力は
読みやすく
美しい文字が
書けること。

- 「右上がり六度法」
- 「右下重心法」
- 「等間隔法」

私はアドバイザーの先生の勧めで京都市総合教育センターで開催された第13回教育研究発表会に参加しました。

まず驚いたことはその発表会に全国から多くの現役の先生方や校長先生が参加されていたことです。

さらに私のような学生も発表会を聴きにきていました。その光景をみて，発表会に参加していない他の人よりも一歩リード出来たような気がしました。

その研究発表会では，講演や，指定都市の調査研究発表や研究員の道徳やキャリア教育発表を聴くことができました。

この研究発表会に行き，私にとって大きな収穫となったのは「授業力向上のための文字指導」という富澤敏彦先生の講演（右欄参照）を聴くことが出来たことです。

文字が読みやすくきれいに書ける担任のクラスは，児童・生徒の授業理解度が高いことをお聴きし，教員になるまでに文字を子どもたちにとって，読みやすくきれいに書けるようにしておく重要性に改めて気づかされました。

その後半では「六度法」という文字をきれいに書く方法も教わることが出来ました。「右上がり六度法」「右下重心法」「等間隔法」という三つのことに気を付けるだけで習字を習うに劣らないきれいな文字を書くことが出来るようになるというものでした。

この講演では「六度法」のテキストである専用のノートも頂きました。実際にそのノートで私も練習しています。これら三つのルールに気をつけると，文字が読みやすくきれいになってきたと手ごたえを感じています。文字を読みやすくきれいに書きたいと思っている人は，一度この「六度法」を試してみてはどうでしょうか。

これからも様々な教育関連の講演や発表会が行われると思います。ぜひ，機会を見付けてこういった研究発表会などに足を運んでみて下さい。必ず新たな発見があり，自分自身の自信にもつながります。

富澤敏彦先生

板書など美しい文字が書けるようになる「六度法マスターノート」を開発・発売した富澤敏彦氏は文科省の海外子女教育専門官などを経て現在，NHK教育テレビや各学校で音読・文字指導や書写など国語教育の豊富な経験を生かした研修の講師として名高い先生です

現場で見て感じることの大切さ

― 研究授業に参加して ―

教育・心理学科 第3学年　高橋　由衣（たかはし ゆい）

児童主体の授業とは

- 自ら課題意識もつ
- 自ら調べ・考える
- 討論・発表で深める

私は，幼稚園一種免許状と小学校一種免許状の取得を希望しています。そのために，1年生の頃から幼稚園，小学校共にボランティアに行かせていただいています。小学校のボランティアでは育成学級や1年生の授業を見ていろいろなことを学んできました。

この度，昨年度からボランティアで行かせていただいている金閣小学校での研究授業に参加させていただきました。

研究授業では，初めて5年生の授業を見させていただくことができ，とても勉強になりました。授業を見て，先生方がこの日のために研究を重ねてこられたことがとてもよく分かりました。私たち学生の模擬授業では見たことのない，やろうとしてもなかなかできない理想的な授業でした。私たちは，授業をする際に指導者の立場で一方的に進めてしまい，教え込みの授業になりがちなのです。ところが，この授業ではとにかく児童主体の授業だと感じました。具体的にどのような授業だったかというと，児童自身が課題意識を持ち，先生の助言によって児童自身が課題に対して考える児童主体の授業でした。その課題に対して家の人に聞いたり自分で調べたりして，情報を学校に持ち寄るのです。そして，その情報に自分の考えを含めて発表し，討論をします。その際の司会・進行役も児童がします。討論も児童によって行われ，その意見を先生が板書し，まとめていかれるのです。その後，先生の適切な助言によって授業が展開していきます。

今回研究授業に参加させていただき，発言内容や授業に取り組む姿勢など，低学年と高学年の差がこれほどまであるのだということに初めて気付きました。今後も，ボランティアなどの体験を通して子どもたちをより理解し，学校の授業のあり方について学んでいきたいと思っています。また，今後の教育実習などで生かしていけるようにより多くの経験を積んでいきたいと考えています。

ボランティアの必要性

教育・心理学科 第3学年　森　　翔輝（もり しょうき）

ボランティアでは，自分が教育者になったときに必要である能力を学ぶことが出来ました。

まず，自分が「教育者」であるという責任感です。たとえボランティアで小学校に行ったとしても，児童からすれば，ボランティアという立場ではなく「先生」であり，支援するにあたっても「責任」を強く意識します。大学の学んだ「教育の責任」を実感する場でした。

また，小学校ボランティアでは学年やクラスに配属される場合が多いのですが，学校によっては学習に遅れがちな児童の学習支援・授業補助を行うこともありました。そこでは，特定の児童に対する深い理解が必要とされました。その中でその児童が自分に発するメッセージに応えなければなりませんでした。

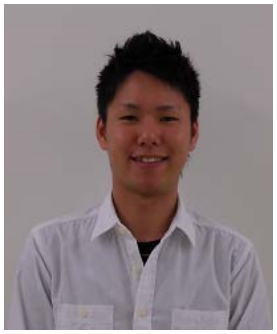
普段のボランティアでは，クラス全体を見て困っている児童がいれば適宜支援するというものでしたが，特定の児童となるとその児童とより深いコミュニケーションが大切になってきます。

ボランティア初日はなかなか児童に認めてもらえず，会話もよそよそしかったのですが，休み時間に児童の興味がわくような遊びを提案したり，話しかけたりと，児童と同じ目線で関わることで，ようやくその児童と関わり始めることができました。

教育実習では，授業指導が主になるため，教師と児童という関係性になってしまいますが，ボランティアは，積極的なコミュニケーションを前提として児童一人ひとりと関わることで，大学生が児童から学級の様子を教えてもらうことが出来ます。

このような体験は，児童と共に過ごす長期宿泊自然体験活動（4泊5日）に参加するとより明確に知ることができました。引率の担任の先生方とは生徒が寝静まった後のミーティングでの打ち合わせに参加させていただくことで昼間分からなかった「先生の苦労やよろこび」を聞くこともできました。自分が学級経営をする際，学級状況を知るために教師からの視点だけでなく，児童の視点・考え方も取り入れなければならないことが自然と納得できました。

このように自分の力になる体験ができるボランティアは，とても意義があると思います。



森君の大学入学以来のボランティア歴は豊富だ。1年には，京都市立紫竹小学校での授業補助や光華小学校での運動会の手伝い。また，2年春休みには地元，滋賀県の老上小学校での経験などで現場感覚を磨いてきた。
また，校外指導では京都市立勧修小学校の「花背山の家」の柊野小学校の若狭での4泊5日の長期宿泊自然体験活動は勉強になったと語る。誠実な仕事ぶりに現場の先生方や子ども達からの信頼は篤い。

（西寺　記）

読書案内

『図書館戦争』シリーズ

有川　浩 著　　角川書店

文学科 第1学年　奥野　佐保（おくの さほ）

有川浩という作家を皆さんは知ってますか？彼女は映画『阪急電車』の原作（幻冬舎文庫刊）や，嵐の二宮和也が主人公を演じたテレビドラマの原作『フリーター，家を買う。』という作品などで特に注目を浴びている作家です。

今回紹介する『図書館戦争』（メディアワークス刊）を彼女が世に送り出すきっかけは，「近所の図書館に掲げてあった『図書館の自由に関する宣言』のプレートです。一度気づくとこの宣言ってかなり勇ましかないかい，と妙に気になっていろいろ調べているうちにこんな設定が立ち上がってきました。」と著者はあとがきに書いています。

私は根っからの読書好きで図書館は大好きな場所でした。特に，高校時代の司書の先生に憧れいつか司書として学校図書館で働きたい，との夢をもっています。

さて，『図書館戦争』の舞台は近未来，正化という年号も31年過ぎた世界。正化元年に「メディア良化法」という戦時の日本言論統制の再来の如き悪法が閣議決定後には，「メディア良化委員会」による度を越えた検閲が蔓延していました。出版物を世の中に送り出すためにはメディア良化委員会の検閲で良とされたものしか出版できないのです。この委員会が，検閲する“ことば”は「床屋」「乞食」といった現在，文面では見ることの少なくなったものから，「耳の聞こえない女性に，耳の聞こえない女性が主人公の恋愛小説を勧める」とか多岐にわたります。メディア良化法というものが拡大解釈されているので，「図書館の自由法」という法律を作り，図書館から図書警備隊が生み出されたりします。

一見，荒唐無稽な物語のように思われる話の展開が実に，巧妙な「言葉の自己規制」につながっていくのです。

そして，作家自身が差別語などに対し「『ここまで書いたら危ないから，ここで止めておこう』みたいな計算が働いてきちゃう」と言うように，メディアの自主規制は何もフィクションの話だけではなく，私たちの身近な世界にも溢れていることに気が付くのです。作家とはなぜこんなにも読者の心を掴むのが上手なのか，私はすっかり，読書の世界に入り込んでいます。

教職支援センターには多くの学生が来室するが奥野さんほど読書について「熱く語る」学生は少ない。本文でも書いているように彼女は将来，学校図書館で働きたいと，輝くように語りだした。
奥野さんが学校司書への夢をもつきっかけは在籍した中・高校の『図書館司書』の先生との出会いである。あたかもそれは，奥野さんが紹介しているように有川浩の小説「阪急電車」に似ている。
偶然，乗り合わせた車両での短時間の出会いは，実は繋がっているように展開し結実しながら今に至る。
ゼヒトモ，次はあなたに書評をお願いしたい。

（西寺　記）

面接セミナー体験記

熱意ある優秀な教員育成をめざして

教職支援センターでは，教員志望の学生に採用選考試験直前の情報提供や志願書の書き方など，さまざまな事がらについて親身な相談体制を確立し，スタッフが対応しています。

今回，「教育・心理学科」の当時３年生（現４年生）が第一期生として卒業することを踏まえ，教員志望者を対象に「面接セミナー」を開講しました。

3月12・27日開講「面接セミナー」

自らの夢に向け，一歩前進！

教育・心理学科　第4学年　中川　翔太（なかがわ　しょうた）

面接セミナーを受けて，面接においての基本的な知識や重要なポイントや本学の教職支援センターの活用や利用の仕方を学ぶことが出来ました。

単に面接の練習をして自分でどこが駄目であったか，よかったかを考えるのではなく，先生や他の受講者から意見をもらう事が出来たことがよかったです。

第三者に見てもらうことによって，客観的に自分の面接の様子を捉えることが出来ました。また他の受講者の練習を見ることによって，自分にはない表現の仕方や語る態度，教育に関する見方・考え方を知ることが出来るので，他の受講者の面接練習を見ることがとても勉強になるということを学びました。

面接セミナーを通して，私は教員になるという夢に向けてまた一歩前進することが出来ました。これからも着実に学び続けたいと思います。

言葉の受け答えがすべてではない！

教育・心理学科　第4学年　福浦 友香（ふくうら　ゆか）

3月12，27日に面接セミナーを受け，事前にもらった質問例の資料をもとに，個人面接の練習をしてもらいました。その中で，学んだことや，感じたことが２つあります。

１つ目は，“慣れ”と仲間の大切さです。いくら質問への答えを用意していても，繰り返し練習することが大切で，練習もせずに本番で答えることはできないと実感しました。また，仲間の面接練習の様子を見て，自分に置き換えて考えられ，一人ひとりの面接が終わるごとに，よかった点や改善点など，意見交流ができたこともとても参考になりました。

２つ目は，言葉の受け答えがすべてではないということです。第一印象は最初の「５秒で決まる」というお話を聞き，立ち居，振る舞いや表情など，体全体で「ゼヒトモ教員に」との熱意を伝えることが重要であるということを学びました。

今回の面接セミナーで学んだことをこれからに生かし，教員採用試験に向けて頑張っていきたいです。

教職支援センター / アドバイザー紹介

本学では教員採用選考試験の情報やその対策などあらゆる相談に乗るスタッフとして「教職アドバイザー」がいます。

左から，細谷僚一，西寺　正，馬場信行の３人です。

大学の教職支援センターの利用頻度の高い学生ほど，採用選考試験の合格率が高いと言われています。ゼヒトモ，夢の実現に活用してください。

細谷　僚一

西寺　正

馬場　信行